

## ○リトルマックの課題の改善への取り組み②

課題

日によって体の状態に変化がある。

動画参照

改善

教師が手元にスイッチを持って行き、  
少しの動きで押せるように取り組む。

結果

少ない動作でスイッチを押すことができ、  
体調の変化に合わせてスイッチの位置を変えて取り組めるように支援するようになった。

## ④ 2つの選択肢からの自己選択

興味・関心が高い

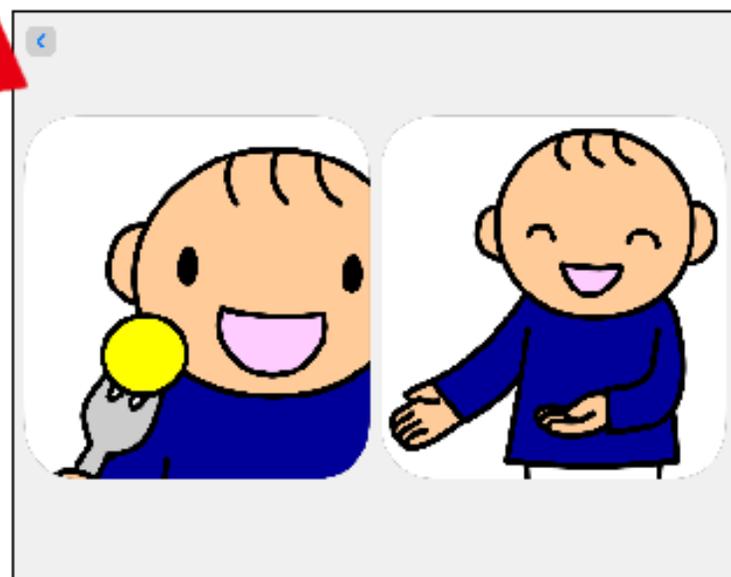
- ・ 夜に食べるデザートを選ぶ活動を設定

自分の生活と関連したわかりやすい活動

動画参照



アイスのキャンバス

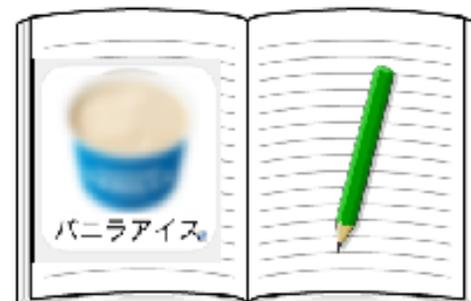


食べたい・おすすめキャンバス

- ・ 学校で選んだことをノートに記載

↓  
家庭でも話題

↓  
達成感を得られる



## ○ICT機器によって得られもの

### 表情や視線でのコミュニケーション

- ・生徒の発信に対して、どうしても間に教師が支援に入らなければいけない状況だった。

自分で伝えたという  
感覚は薄れてしまう。

### ICT機器（スイッチ）を活用したコミュニケーション

- ・自分でスイッチを押すという行動によってタブレットから音声を流すことができる。

自分で伝えることができた  
という感覚を得られる手段



伝えられる楽しさを感じら  
れるもの

## ④伝える相手の広がり

### ○伝える相手の変化

#### 表情や視線でのコミュニケーション

- ・ 普段関わりの少ない相手が表情や視線から読み取ることが難しく、伝える相手に限られる。

#### ICT機器（タブレット）の活用

#### ICT機器（スイッチ）を活用したコミュニケーション

- ・ 自らスイッチを操作して選択できる手段となり、普段関わりが少ない相手も本人の伝えたいことを理解できる手段となった。
- ・ 学習場面で選択して答える機会を設定することもできる。

伝える相手の広がり

使用する場面の広がり

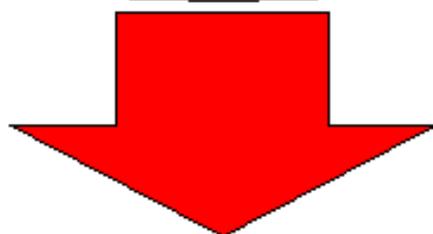
### 3 成果と課題

#### ○自立活動の視点の大切さ

脳性まひの生徒がICT機器を操作するためには、まひの状態や体の動かし方などの実態把握が必要。

#### <自立活動実態表>

自立活動実態表の活用



障害特性を踏まえた指導につなげることができた

#### ○7つの視点

- ア 健康状態
- イ 姿勢や運動・動作
- ウ 日常生活の基本動作
- エ 作業の遂行
- オ 感覚・知覚
- カ 人との関わり・コミュニケーション
- キ 言語理解・言語表出

○脳性まひの生徒にとってのICT機器の役割

学習場面だけではなく、コミュニケーションの支援  
においても重要な役割を担う。



ICT機器  
(タブレット)

自発的なコミュニケーション  
を実現することのできるもの

## <対象生徒Aの成果と課題>

○ICT機器を通して自分で発した言葉を耳にする機会が増えたことで…

- ・以前よりも聞き取りやすい発語が増えた。
- ・これまで使っていなかった言葉も発語として表出するようになった。

○ICT機器によってタブレットを活用したコミュニケーションをとれるようになったことで…

- ・普段表現することの難しい言葉を自ら伝えることができるようになった。
- ・コミュニケーションの場面だけではなく、様々な場面で「やってみよう」という気持ちを育み、「主体性」につながっていった。

○卒業後の生活を見据えて

移動する手段  
(電動車いす)

+

伝える手段  
(ICT機器)

電動車いすで様々な人のところへ自ら行き、自発的にコミュニケーションをとる。

○今後の取り組み

VOCAによるコミュニケーション指導を継続して取り組み、タブレットによるコミュニケーションでたくさんの言葉を学び、学んだ言葉を発語でも表現できるようになってほしい。

## <対象生徒Bの成果と課題>

○体の状態に配慮した指導

### ICT機器を活用したコミュニケーション

体への負担から必要なのか悩むこともあった。

【 スイッチを押して自分で伝えられたときの表情を見るとICT機器を活用したコミュニケーションを実践して良かった。 】

対象生徒Bにとって

- ・生徒の伝えたい気持ちが前面に出てくるコミュニケーション手段
- ・「達成感」を得られる手段

○今後の取り組み

本人だけではなく、保護者もICT機器を活用したコミュニケーションを前向きに捉えており、

家庭でも使用して楽しむことができる手段としていきたい。

## 4 まとめと今後に向けて

### ○ICT機器活用の課題

- ・ 指導する教師がタブレットの操作に慣れ、使いこなしていく必要がある。
- ・ 現時点でICT機器に対する抵抗感を持つ教師も少なくない。  
私自身も決して得意だったわけではなく、インターネット等で検索して情報を得たり、動画でタブレット操作や周辺機器の接続方法など調べたりして実践してきた。
- ・ 誰もが見てわかる教科書のようなものはないため、特定の人のみがICT機器を活用できる状況は大きな課題であると捉えている。

## ○ICT機器活用の課題に対しての方策

- ・自ら調べて実践するだけでなく、横の繋がりで教師間での学びを進めることが大切となる。

本校では、DropTalkのアプリの研修として

作成方法の動画を共有している。

動画で実践してくれる教師もいるため、ICT機器の活用を広げていくツールとして動画は有効的な手段だと考える。

- ・家庭でも同様に動画を使用して共有することで、卒業後に使用できる環境を整えていくことができると考える。

## ○卒業後の生活に向けて

ICT機器を活用したコミュニケーションを継続していくためには…

- ・誰もが理解できるようなマニュアルを作成して引き継ぐ。
- ・実践して覚えていくしかない。

### 周辺機器の接続

- ・それぞれの説明書を見るだけでは、理解することが難しい。



試行錯誤を繰り返していく中で学んで行くことが大切。

ICT機器の利活用の推進